「川からの恵み」

大阪府　追手門学院大手前中学校
一年　上田拓舞

僕は、大きな川に沢山の蛍が、夜空に光る星の様に、手を伸ばせば、すぐに、捕まえられる程の大群を見たことがあります。

田舎の祖父の家の前には、きれいで、緩やかな川が流れ、川の端岸に、青々と真っ直ぐに生え育った萱が茂っています。辺りが暗くなると、沢山の蛍が「待ってました」と、ばかりに、いっせいに飛び始めるのです。

僕は、この足首程の深さしかない川に、弟達と入り、手づかみで、小魚を捕まえ、タニシ、イモリ、ヤゴなどを取って遊ぶのが、公園で遊ぶよりも、とても大好きでした。

しかし、今では、この川は、驚くばかりに、全てを変えてしまっているのです。川の上流に、温泉が出来たからです。

僕が、小学生になった年でした。祖父から「温泉が湧いとるけん、早く遊びに帰りさいや」と誘われました。僕は、とても嬉しく、この年から、祖父の家に遊びに行くと、必ず毎日温泉に入っています。

温泉が出来た嬉しさの反面、さびしくも感じます。なぜかと言うと、川遊びが、出来なくなった事と、たった五・六年の間に、蛍の生息が減少してしまったからです。

川へ降りる道もなくなり、川の端岸はコンクリートで整備され、自然で緩やかな流れは、人工的となり、萱どころか、草の生えるスペースさえもなくなってしまったのです。

見映えは、芸術的なものかも知れませんが、以前の川を知っている僕達には、かなりの衝撃でした。

また、川だけが変わったのでは無く、温泉利用客が増えるに連れ、道路はアスファルトで固められ、山は削られ、山崩れの防止に高い壁が造られました。周りが全て変わってしまったのです。

もちろん、洪水や、山崩れの心配がなくなり、人でのいる夏の草刈も、しなくて良くなった訳ですから、高齢者の多い祖父達の周りでの生活は、便利で安心できる環境になったと思います。

しかし、現在の川は、川としての大きな役目は果たしているのでしょうが、本来の僕が思っている「川からの恵み」には、欠けているような気がします。四季の楽しみも、流れる水の音も自然に感じられなくなっているからです。

僕たちの住む大阪にも、沢山の川が流れています。以前の淀川は、大雨のたびに、洪水の被害にあっていました。現在は、スーパー堤防が建設され、住人達の、洪水による恐れは軽減されました。また、第二次世界大戦後、急激な工場等により、淀川は、ひどく汚染されましたが、いろいろな研究と、住人達などの働きにより、綺麗な淀川が戻るように試みています。

下水処理場では、蛍の飼育に成功し、大阪にいながら、蛍を観ることが可能になりました。

僕は、人間が住みやすい環境と、自然界の生物が住みやすい環境が、共有出来る社会が一番だと思います。

僕達は、何年かかっても、川から受ける沢山の恵みを、いつの世代にも残していかなければ、ならないと思います。

「水について考える」

和歌山県　近畿大学附属和歌山中学校
三年　栗山航一

韓国への修学旅行から帰った姉が言った。

「日本はすごい。水道の水は、そのまま飲めるし、トイレに流す水も飲めるから、すごい。」

姉の話によると、韓国の大きなレストランでは、一度に大勢の人がトイレを使うと、タンクの水がなくなり、水瓶から水を柄杓で汲んで補充し、流さねばならなかったそうだ。しかも、トイレットペーパーも流してはならず、備え付けの容器に入れねばならなかったそうだ。それまで僕が持っていた韓国のイメージは日本の隣国で、日本と同じような近代国家だっただけに姉のその感想は驚きだった。

僕にとって、蛇口から出てくる水が安全で直に飲めることは当然だし、それと同量の水がトイレで流れ、プールや風呂や水遣りや車の洗浄にふんだんに使われることに何の抵抗も、有難味も感じていなかったが、改めて考えると、日本ほど水に恵まれ、水を贅沢に使っている国は他にはあまりないかもしれない。

そんな日本人が水の大切さを痛感した出来事はやはり阪神淡路大震災だと思う。僕はまだその時二才で記憶はないのだが、十一年後の今でもなお繰り返し放映される当時の映像に心が震える。地震で倒壊した建物、二次的に発生する火災、避難所の人々の様子、そして給水車からの水の配給を各々容器を両手に持って静かに待つ人の列。水を手に入れることが出来た人は満面の笑みを浮かべ両手にずっしりと重いタンクを提げ家路を急ぐ。途中で給水切れになり水を手に入れられなかった人は落胆と困惑の中、空の容器を提げ、その場を後にする。日頃はごく当たり前であるきれいな水、飲める水が命にとっていかに大切であるかが伝わってくる光景だ。

震災について、もう一つ僕の心を揺さぶったのは、震災が起こった一月十七日の二週間後、被災者を少しでも元気づけよう、ボランティア参加を広く呼びかけようと製作され、放送されたＣＭだ。二シーン十五秒の短いものだが、それが伝えるものは計り知れない。倒壊しかかった古い家屋の壁面の水道管らしきものに手書きの張り紙がある。

水　自由に使って下さい
水　自由に使って下さい
そのままは飲めません

そして関西弁の男性の声、

「水出てるよ、水持ってって、そやけど生で飲まんとってな　ポンポンこわすよって」

それにかぶせて、人の往来とかすかな水音。最後に『人を救うのは人しかいない』というメッセージが映し出される。

この張り紙をした人も被害者である。被害を受けた自宅の井戸水を少しでも同じ被害者に使ってもらおうとしたのである。そして、このＣＭの製作スタッフも全員、被害者だったらしい。この井戸水は命をつなぐのみならず、人の温かさを伝える水でもあるのだ。

人の体の七〇％は水分でできている。食物がなくても水があれば一ヶ月くらいは生きることができるが、水がなければ二、三日しか生きられない。水に恵まれた日本に住む僕たちだが、震災の経験や悪化している環境汚染を考えると水に無関心ではいられない。大切な水を守るために僕達に何ができるだろう。

まず、水を粗末に扱わないこと。水は無尽蔵ではないと認識することが大事だ。使いまわせるものは使いまわして節水の習慣を一人一人が身につけねばならない。

そして、湖や川や海などの水源を汚さないようにすること、水を汚しているのは人間である。石鹸、洗剤、油、米のとぎ汁などの生活排水、工場から出される産業排水、それぞれ人間が利便性を追求した結果である。

僕達は水に対する意識を改め、日本を末永く水と緑の国に、更には地球を水と緑の惑星に保つために努力しなければならない。

「ダム湖のほとりから」

島根県　美郷町立邑智中学校
三年　岡　先　綾　子

「ウ――。」ダムの放水を知らせるサイレンが鳴っています。大きな大きな音です。『うるさいなぁ。』そう思いながらもサイレンなど聞こえていなかったかのように私はテレビを見続けています。そんな私が祖母の話を聞いたことがきっかけでダムと「水」について考えるようになりました。

私の家は浜原ダムのダム湖のほとりにあります。このダムは昭和二十九年、私の祖母が中学校三年生の時に完成しました。私が生まれるずっとずっと前のことです。

祖母がダムの話をしてくれました。「ダムがつくられるからってな、おじいさんが通っとった信喜分校が移転になったんよ。」今でも校庭にあったらしい銅像の台座が家の上流の水中から少しのぞいています。第二次世界大戦の時に鉄砲の弾をつくるために二宮金次郎の像だけ強制的にとられ台座だけが残ったまま水の中に沈んでいます。台座が水に沈んでいく間、祖母はとても寂しい気持ちになったそうです。

「交通の便は良くなったけど、やっぱり学校の周りに住んでいた子達が引っ越したりしてずいぶん人が少なくなったんよ。」それを聞いて私は、一体何のために民家や学校を移転させてまでダムがつくられたのかと不思議に思いました。そんなに大切なものだろうかと思い、祖母に尋ねてみました。すると祖母が「ダムの水はな、吾郷の方に明塚発電所があるでしょ。あそこに流れていってからな、そこで水力発電して広島の方におくっているんだよ。」と答えてくれました。毎日見ているダムにそんな働きがあるなんて考えたこともなかったのです。私にとってダムは生まれた時からあるもので、あまりにも身近な存在だったからなのでしょう。今まで何に使われているのかよく分からなかったのにそれが水力発電のために利用されていると知ってダムはとても大きな存在だと感じたのです。

その他ダムには治水や飲料水の供給といった役割があることが分かりました。水の力は電気にも変わりますが、私たちの命をはぐくみ、守る大きな力にもなっているのです。

私の家の水は去年簡易水道になったばかりです。目の前に、水を満々とたたえたダム湖があるのにそれまではホースで山水をひいて家で使っていました。しかし、この方法では水がこなくなってしまう時があり、度々山へ行ってホースの調子を見なくてはいけませんでした。日照りが続けば水が少なくなり水源まで行って水がホースに入るようにし、大雨になれば葉っぱなどのゴミがつまるのでそれを取りに行っていました。父や母は仕事なので祖母がほぼ毎回やっていました。水道になってから祖母は「お金はいるけど、蛇口をひねるだけですぐ水が出てきて本当にありがたい。そういえばあの頃は大変だったな。」と語り始めました。私が一歳の頃に大きな水不足になったそうです。「山からチョロチョロしか水がこんでな、お風呂は江の川からくんできてためたし、洗濯は谷まで洗濯物を持っていって手洗いしたんよ。食器なんかは洗剤なんてあんまり使えんけぇ茶色くなったりしとったねぇ。本当、つくづく水の大切さを思い知ったわ。今は水道になって本当にありがたい。」祖母はそう言って心からうれしそうな顔をしていました。

現代の人は私も含め、昔の人よりも水はあってあたりまえだと思い込みすぎています。水は地球の生命を維持するのに不可欠な「生命の源」です。その水をもっと大切に使わなければならないと祖母の話から思いました。

私の心の奥をふるわせて、ダムのサイレンが鳴り響きます。そのサイレンに「水について考えて」と言われているような気がしました。これからその音を聞くたびに、水のありがたさを再認識することでしょう。

「水とダム」

岡山県　苫田郡鏡野町立富中学校
三年　赤木克啓

夏になると「渇水」という言葉をよく耳にします。ダムなどの水がなくなって、枯れてしまうことです。そのため水道の水を使うのも時間制限になったり、水が出なくなることもあります。こういう事になるといつもやっている事ができなくなってすごく困ると思います。

また、田にも水がいかなくて、田植えができなくて、カラカラだとかのニュースを毎日のようにテレビで見ます。そして、ダムの水がなくなって、ダムの底に沈んでいた建物が姿を現わしたのをテレビで見た時は本当に深刻な問題なのだと思いました。

幸い、僕の住んでいる所では、水不足を感じたことはありません。僕の家では、簡易水道もありますが、簡易水道ができる前から使っていた、裏山から引いている水道もまだ使っています。家の前には、旭川の支流の目木川も流れていて、夏になると、僕達は、川にもぐって遊ぶこともできます。

渇水の反対に「洪水」もおきます。富では、渇水は起きませんでしたが、洪水では、大きな被害を受けました。平成十年の台風による大洪水で、町外に通じる道が流されたり、木が倒れて通行止めになったりしました。またもう少しで流されそうになっていた家もありました。実際、僕の家の前の川ぞいの道路は、通常、川から十五メートルの高さにあるのに何十メートルかにわたって、流されていました。これには、その頃小さかった僕も水の恐さを理解しました。

そして、その後、僕の家の近くの山などには、砂防ダムがいくつかできています。

僕の父は今、愛媛県でダムの建設をしています。今までにも岡山県、京都府、兵庫県でダムの建設にかかわってきました。しかしダムそのものは、テレビ等で見たことはありますが、役割はあまり知りませんでした。だから父がかかわっている仕事は、どんなものか、インターネットなどで調べてみました。

ダムの働きの一つは「洪水を防ぐ」です。大雨が降った時に一気に下流へと流れる水を一時的にダムに貯め込み、流れる量を減らし川が氾濫しないように少しずつ流します。

もう一つは、「水を利用する」ためです。日照りが続く時など、ダムに貯めた水を適度に流し、生活用水、水道水、工業用水、農業用水などとして利用します。僕は、とても便利だと思いました。そして、ダムは私達の生活に大きな役割をはたしていることがわかりました。

今、父がかかわっているダムは、愛媛県、西条市にある志河川（しこがわ）に造られています。完成まで、あと約四年かかるそうです。工事は、大量のコンクリートを使ったり、徹夜で仕事をしたり、とても大変だそうです。しかし、そのダムによって、大勢の人達が助かったり生活が豊かになるのです。そのダムがそこに住んでいる人達の生活や土地を守っていく、やりがいのある仕事だと思います。

ダムの事を調べるうちに、僕が毎日なにも考えずに自由に水を使えることが、どんなにありがたいことかがわかってきました。

また、目木川の水も何十キロと流れてダムにたまったり、いろいろな所で利用されていることもわかりました。旭川の源流に住む僕達は、水の大切さを感じながら生活していきたいと思います。

「生態系から学ぶ水との共生」

山口県　周防大島町立大島中学校
三年　藤井絢子

地球上の生態系は、「水と空気と磁力」によって守られています。この偉大なる自然界において、水は最も基本的な部分であらゆる生命を支えており、私たちが今、何不自由なく生活が出来ること、それらの全てが水から始まった文明によるものだということを頭に置き、先人たちの英知と苦労に感謝の気持ちを抱かなくてはならないと思いました。

私たちは歴史の授業で、エジプト文明・メソポタミア文明・インダス文明・黄河文明といった大河流域に発生した四つの古代文明から、都市・階級・文字・国家が生まれたことを学びました。そして、我が国日本においても、河川などの淡水生態系は、私たちの日常生活においての水の供給源であり、あらゆる動植物の生息地として生命を育んでいます。もちろん、水は農業や工業においても不可欠であり、近年では工場から出る廃水により水が汚染されるという深刻な問題まで出てきました。文明の発達には多かれ、少なかれ差が生じてきますが、今世界中で衛生的な水が飲めない人が十億人以上もいるという現実。これは、地球上の五人に一人が安全な水を飲めないということで、水が原因の病気で亡くなっている人が、毎年三百人以上もいるということです。私は、同じ地球に住み、同じ資源を授かっていながら、このように苦しんでいる人々がいることを知り、とても悲しくなりました。水に対する意識は誰もが強く持っているのに、水をとりまく世界環境が著しく悪化しているからです。

では、なぜこのような現象が起こってくるのでしょうか。先人たちは、あらゆる英知を振り絞って、数々の文明の利器を作り上げました。おかげで生活水準は向上しましたが、これらが生み出した副作用によって苦しめられ、犠牲になっている私たち人類、そして動植物がいるということを考えずにはいられません。

私の住んでいる周防大島町は、瀬戸内海で三番目に大きな島であり、指折りの長寿の島としても知られています。島の中央には、屋代川が流れ、上流には洪水・干ばつ対策に造られた屋代ダムがあります。屋代川は、魚や蟹、蛍などの生息地として、また農業かんがい用水として幅広く島民の生活に役立っており、川沿いに続く桜並木の美しさには心の安らぎを感じます。沿岸部に生息する海洋生物は、屋代川からの水の栄養を摂取し、川と海とのバランスが上手く保たれ、小さい頃は家族で貝ほりや海水浴を随分と楽しんだものです。足元の砂がきれいに見える透き通った水の中を小さな魚が泳いでいる光景を見るのが大好きで、それが当たり前として育ってきた私は、自然というものがどれ程大切なものかを知らないうちに教えられていたような気がします。そういった私も、ごく最近までは田舎というイメージが嫌いで、都会に憧れていましたが、水をとりまく生態系について考えてみると、これ程自然に恵まれ、健康に過ごせる今の環境に愛着を感じ、今ではこの島に生まれてきて本当に良かったと思っています。

深刻な環境問題が取り上げられている中、全ての人々が水の恩恵を受け、健康に暮らせるために、私たちは何をしたらよいのでしょうか。かんがい用水の効率的な利用や廃水リサイクル、工業用水の見直しなど、もっと真剣に取り組むべき問題が沢山あります。

今、自然の中で生かされている私たちに与えられた課題は、水とどう向き合っていくか、水との共生について前向きに考えていくことではないでしょうか。「水の惑星」である地球に生まれた者として、水の生態系が永遠に維持されることを願う気持ちは、私一人ではありません。今を精一杯生きているあらゆる生物の訴えが聞こえてくるようです。今こそ私たちが守っていかねばならぬと…。

「明連川の再生と水の大切さ」

徳島県　美馬市立三島中学校
三年　香　川　千　夏

去年の夏休みの真っ最中の時のことだ。私は偶然、学校のみんなで植樹をした明連川の土手を通っていた。そこには、植えたクヌギが濃い緑色の木の葉が、真夏の太陽を照り返しながらキラキラと風に揺れていた。

「明連川」この川の名を知っている人はどれくらいいるだろうか。明連川は三島中学校校区内を流れる二・八キロのとても小さな川である。その昔、同じく校区内を流れる吉野川に堤防がなかった時代に、その一部であり洪水の時だけ水が流れる、地域の人から恐れられた「暴れ川」だった。その後、吉野川に堤防ができてからは、水の流れもほとんどなくなり、地域の人々から次第に忘れ去られていった。そしてその後、草や木々が水さえ見えないほどに生い茂り、川が見える所に流れる水は、洗剤などの生活廃水が直接流れ込み魚などすめるはずもない、悪臭を放つ、緑色のまさにドブ川となっていた。

しかし、六年前私達の先輩から始まったビオトープ活動のお陰で、川は美しい姿を取り戻そうとしている。現在の明連川には、透明に澄みきった水が流れ、人が安らいで通行できるよう、ベンチが設置されたり、色々な種類の植物が植えられ、きれいな水にしか生息しないプラナリアまでが見られるようになった。

しかし、ここまできれいな水を取り戻すことは容易ではなかったはずだ。中学校の授業の一貫でビオトープ活動をするまで水どころか、明連川について興味をもったことはなかった。水はたやすく手に入るものだと考えていた私にとって驚くことばかりだった。

最初は先輩がきれいにした場所へ見学に行き、川と触れ合うことから始まり、私達が整備する区間はどうしたらみんなが過ごしやすい川になるかや、自然を増やすプラン作りに携わった。そして実際に植樹などの活動をした。その後も後輩達によって活動は受け継がれている。

今の明連川には自然が増えたからか、タヌキやタカなどの動物、絶滅危惧種の植物が見られる自然豊かな場所になった。「生物の生きられる空間」となったのだ。私は明連川の再生に取り組み、明連川の自然豊かな空間を作ったのとこの環境を支えているのは水だと切実に思った。水は全ての命の源なのだ。水が澄めば、微生物が生き、それを食べる魚が来る。そして、それを狙って鳥や動物がすむ。

そして水がきれいだと植物も育つ。こうして明連川は自然を増やしてきた。

ここまで再生するには多くの人の努力と費用がかかっている。この大きな事業が終了してしまう時が何年か後にきっとくるだろう。

しかし、その時、川の水はまた昔のようになり、自然が失くなるのだろうか。私はそうであってほしくない。

私達は水と自然がなければ生きてはいけない。水と自然がなくて生きていける時代などいくら科学が進んでもありえない。だからこそ、水を汚すことも守ることもできる私達生徒や地域の人々が、明連川の水を守らなければならない。生物が生きていける空間を守るのは大変なことに思えるが、一人ひとりが、「水と自然を大切にする心」を持ち、明連川に対してできることを一つずつやっていくことが、未来の水、明連川を守ることにつながっていくだろう。

地域の川「明連川」の再生について考える中で、豊かできれいな水がどれだけ自然と私達の生活を支えてくれるか知ることができた。

私は自分が植えたクヌギが大きく育ち、将来家族でカブトムシを見つけたり、ドングリ拾いができるよう豊かな森になっていて欲しい。この夢の実現のためにも水についてもう一度見直し、地域の人々と水を守るためにできることを考えていきたい。何十年後に、明連川に流れる水と笑顔で出会えるように。

「四国の水がめに学ぶ」

香川県　綾川町立綾南中学校
一年　苧坂美里

私たちは毎日、生活の中のいろいろな場面でたくさんの水を使っています。水道の蛇口をひねればあふれ出す水…節水しないといけないと頭では分かっているのに、いざ使う時には水を出しっ放しにしてしまいます。きっと心の中に「ちょっとぐらい使い過ぎても大丈夫。」という思い上がった気持ちがあるからだと思います。でも、もし皆が私と同じ気持ちで水を使っていたら、どうなってしまうんだろうと、不安になりました。

私はこの春、校外学習で早明浦ダムへ見学に行きました。四年生の時に香川用水の勉強をしたので、私たちの住む香川県は早明浦ダムのおかげで水に困らなくなったことは知っていました。でも、実際に行って話を聞くと私の知らなかったことがたくさんありました。

西日本では最大のダムで、大量の水を貯めることができ、また、多目的ダムでは日本一だそうです。洪水の時には川の水を調節して災害を防いだり、水力発電をしたり、いつも川に水が流れるように調節したり、香川用水に送る水を貯めておいたりと、多くの目的があり、私たちの生活に役立っていることが分かりました。また、その三十パーセントの水が香川用水として利用されていることも知りました。

今は早明浦ダムのおかげで水に不自由なく生活できているけれど、早明浦ダムができる前はどうだったんだろうかと思い、祖母に聞いてみました。

私の家は農家で米作りをしています。香川用水ができるまでは、どの農家もため池の水のみを利用していたそうです。池から水を引く時には「盗っ人ゆる」から水をとられないように、日中なら子供達が水門の番をさせられていたそうです。皆少しでも多くの水を取ろうと必死で、水の取り合いでけんかも度々あって本当に大変だったということです。

今では減たんや田が宅地化して減ったうえに、香川用水のおかげで水不足はほとんど解消されて、農業もだいぶ楽になって、感謝しているという話でした。昔は本当に大変だったんだなぁと、改めて自由に水を使えるありがたさを実感しました。洗顔の時には水を出しっ放し、お風呂の時にも湯船の水を使わずにシャワーを出しっ放しにしていた自分が恥ずかしくなりました。自分さえ良かったら良いという自己中心的な考えを捨てなければ、節水にはつながらないと思いました。

でもいくら早明浦ダムの水がたくさんあるからといっても、水がなくならないとは限りません。平成六年の水不足では、食事の用意ができない、水洗トイレが使えないなど家庭生活や社会活動に大きな影響が出たそうです。私の住んでいる綾川町でも「滝宮念仏おどり」をして雨ごいをしたそうです。近年でも、夏場になると水不足気味になり、節水が呼びかけられています。水不足になってから水を大切にするのでは遅いので、日頃から水の無駄使いをなくしていく努力をしていきたいと思いました。

そこで私たちが身近にできる節水について考えてみました。まず、歯みがきや洗顔、風呂の時には水を流しっ放しにしないことです。また、風呂の残り湯は洗たく・掃除・水やりなどに利用したり、水道の蛇口に節水コマを取りつけることなどです。そうするだけでもかなり節水につながると思います。

早明浦ダムに見学に行って、これまで以上に節水への意識が高まりました。早明浦の水には、水に困っている私たちのために、古くから住み慣れた土地をはなれることになったたくさんの人々の思いがつまっています。今こうして水に困らずに生活できる幸せと水を大切にした先人の心を忘れずに、毎日大切に水を使うように心がけていきます。

「命の水を守る
――未来への資源を残すために――」

愛媛県　松山市立雄新中学校
二年　青　木　さやか

私たちは、毎日の暮らしのためにたくさんの水を使っています。家庭でも、病院や工場でも、たいへんな量の水を使っています。それでも水がなくならないのは、水が雨となり、川となり、海となり、あるいは空の雲となって、地球上を大きく循環しているおかげなのです。そう考えると、水は永久になくならない、いくらでもあるものと思ってしまいがちです。

しかし今、水の豊かな日本でも水不足が問題になっています。日本ではたいてい、水道水は川からとり入れていますが、川を流れる水の量は、雨や雪の降りかたによって異なります。自然のままの川から水をとるのでは、雨が少ない季節に水が足りなくなってしまいます。

平成六年七月、私の住んでいる松山でも、梅雨時期の記録的な雨不足の影響で、ダムの貯水量が日々減少しつづけ、とうとう給水制限が断行されたそうです。水道が使えるのは、午後四時から午後九時までのたった五時間。この五時間の間に、炊事、洗濯、掃除、入浴など水を使うすべてのことをしてしまわなければならなかったのです。

水の出る時間帯になると、外には人けがなくなり、たくさんの車が行き交うはずであろうラッシュ時の夕方でさえ、見かける車はまばらだったそうです。

人が集まれば、話題は水の話で、お風呂の残り湯やお米のとぎ汁の上手な利用方法、水の使用を最小限にとどめた洗濯のしかた、食器洗いの水を節約する方法など、みんながアイデアを出し合い、少しでも水を節約できるように努めたといいます。

このときの水不足は、街の様子を変え、人々の生活にも大きな影響を与えたようです。そして何より、水が限りある資源だという、私たちが少し忘れかけていた大切なことを、思い出させてくれたのではないかという気がしてなりません。

水不足の原因の一つには、水の循環が断ちきられ、水のもつ力が弱ってきたということも考えられます。これまでの方法で、今以上に使える水は、あまりないのです。新しくダムをつくることは、多くの場合、自然破壊につながるなど、難しい問題があります。

今の水源を有効に利用し、使う水の量をおさえるとともに、雨水を利用するなど水をリサイクルして、無駄なく使う工夫をする必要があります。

そして、汚水を川や海にできるだけ流さないようにし、自然の中の水を、これ以上汚さないようにしなければなりません。

私たちが、毎日水道を使うということは、毎日水を汚して家の外に出しているということでもあるのです。私たちの生活そのものが水を汚す原因になっていることをしっかりと認識すれば、生活排水による水の汚染を防ぐには、一人一人の心がけで、私たちにできることがたくさんあることに気づくはずです。

いま世界では、水不足や洪水、水の汚染、広がる砂漠など、水に関係する問題をかかえる地域があちこちにあります。それらの問題は、森林を伐採など人間の活動に多くの原因があるのです。

水は私たちが考えるよりもずっと大きな力をもっています。その力が、私たち人間をふくむ、多くの生き物がくらす大地をつくりあげてきたのです。つまり、私たちは水という資源に守られながら、命を受け継いできたのです。

その命の水を守るためには、まず自分たちの手で汚さないということが第一歩です。自然を保全するということは、水を保全するということであり、ひいては、私たちの暮らしを向上させることでもあるのだから…。

「水と僕ら」

佐賀県　弘学館中学校
二年　吉岡慎平

春になると、祖父宅の近くを流れる城原川の土手が、黄色一色で色どられる景色を見るのが、僕の楽しみの一つだ。山村暮鳥の『いちめんの菜の花』を思い浮かばせるようなその景色は、見ているだけで、僕自身がその景色の一部になっているような錯覚を起こし何だか心がほうと落ち着くのだった。

だがこの作品は違っていた。河川工事のためにその川の土手の様子は変ぼうしていた。

川は中ほどまで土が盛られ、土手の側面は削られていた。橋の下には、大きな円筒型の土管が三つ並べて置かれ、トラックが次から次へと土を運んできている。昨年までの春の景色は、どこにもなく、川は見るからに人工的な川へと姿を変えつつあった。

僕はとても残念だったが、必要な工事なのだろうから仕方ないなと思いつつも、一方では川の治水工事が腹立たしくも感じられた。

そこで僕は、治水について考えてみようと思った。治水というと、僕が真っ先に思いついたのは、石井樋のことである。僕の住む大和町には、成富兵庫茂安が江戸時代に造った施設が、今も残されている。石井樋はその一つで、嘉瀬川から多布施川へ水を分けるための施設である。この施設により分けられた水は、佐賀城下の生活用水と農業用水として使用されたそうだ。中でも土砂の混じった川の水を象の鼻、天狗の鼻など石で造られた施設を組み合わせ、土砂を沈め、きれいな水にする工夫がされていたというからすごい。現在は〝石井樋公園〟として整備され〝さが水ものがたり館〟が建てられた。僕はそこを訪ねてみようと思った。近くに住んでいるが、石井樋を訪れるのは初めてだった。公園を訪れてみて、改めて先人の知恵と努力に感心した。

公園内では、江戸時代の石積みが見られた。その積み方は、荒っぽく感じられたが、手作業だった当時のことを思えば素晴らしいと思う。

水辺の施設を見て回り、成富兵庫茂安の治水・利水工事に対する熱意と優しさ、自然に対する敬意が感じられた。自然な川の流れを損なうことなく、人々の生活に利用できるように工夫された施設の随所に『水』を大切に考えていた昔の人々の自然への謙虚さがうかがえるように思えた。広大で平坦な地形からなる低平地の佐賀平野は、昔から「降れば大水照れば干ばつ」と言われ、人々が水に苦労してきた。だから治水・利水工事は必要不可欠であったのだ。この施設が必要だったことは言うまでもないだろう。すごいの一言だ。

水辺を歩いたからか、僕は気分がスッキリした気がした。近年注目されているマイナスイオン効果のおかげだろう。水は『生』そのものだなと思った時、ふと新聞記事を思い出した。『海の不思議カルタ』のコーナーで、マリンワールド海の中道の館長高田浩二氏が『ヒトは形を変えた魚　体内に　その証拠』というカルタの文言を作られていた。その解説には『魚類は脊椎動物の進化の中で最も古い生き物だが、私たちホ乳類は頂点にいるかのように魚をさげすんでみる時もある。しかしヒトの体の中には魚の面影が随所にある。何より母の胎内でエラ呼吸をし水中生活をしていた胎児の頃を思い出そう』とあった。ヒトをやゆしているようで面白いと思う。と同時になるほどと納得させられた。ヒトも自然の一部なのだ。知恵を持つために、自己中心的に振る舞うヒトは、我を見失って、何か勘違いをしてきてしまったのかもしれない。環境破壊がもたらすものは、ヒトだけではく生物全ての滅亡であることを、ヒトはもっと深く認識すべきだったのだと思った。そして、自然と共存しながら開発を進めていく必要を感じた。また、生の営みや水の恩恵から生まれる景色を次世代につなげ残す義務と責任を担っている僕たちが、今後、成すべきことは、物事を広く多く学び、深く理解することで、正しい判断力を養うことだと痛感した。

「懐しき川へ……」

熊本県　天草市立倉岳中学校
三年　山畑まい

先日の友達の一言です。

「この前、弟が浦川でシロウオ採ってきたんだ。」

この言葉を聞き、私はとても驚きました。もう、あの川でシロウオが採れるなんて思ってもいなかったのです。

私の住む倉岳町は、山と海に囲まれた自然豊かな場所です。特に私の住む浦地区には、浦川と呼ばれる小川があり、浦地区に住む子どもたちにとって身近な遊び場の一つとなっています。私も幼い頃、暑い日には冷たくてきれいな浦川に涼を求めてたびたび遊びに行っていました。そこで、魚を採ったり、水遊びをしたり、木陰に住む昆虫採集をしたりとケガや服が汚れるのもかまわず、日が暮れるまで川遊びを満喫したものです。また、小学校の頃、部活動の前にはごくまれに青いきれいな羽毛を持つカワセミなどの野鳥と出会うこともありました。そんな浦川について小学校三年生の時、きれいな川にしかいない生き物がいると知って、私はとても誇らしく思えました。

しかし、私は年を重ねるにつれ浦川に行くことも、浦川を誇りに思っていたことも忘れて生活していました。

中学校に入学し、しばらく経った頃のことです。別の地区に住む友人に

「浦川って汚ないんでしょ。」

と言われたのです。私は、きれいな浦川がなぜそんな風に言われるのかわからず、驚きとショックを受けました。

私は、友達の言葉を確かめるため、久しぶりに浦川へと足を向けました。すると、私が浦川を忘れている間に思いもよらないことが下流の方では起っていたのです。下流には見るからに「汚ない」川があったのです。

川の流れは、垂れ流しの油、生活汚水の泡によって濁り、所々にゴミがポイ捨てされています。川の石もひどく変色していて、とても生き物が住んでいるようには見えない状態だったのです。この状態を見た私は、その後浦川を見る勇気がありませんでした。浦川を見ると前よりももっとひどくなっているような気がして、自分の幼い頃のきれいな思い出までも汚れてしまうような気がしたのです。

そんなある日、私は浦川へ行かなければならない機会が訪れました。その機会とは、各地域ごとに小学生から高校生までが協力して行う、ゴミ拾いのボランティア活動です。そこで目にした浦川は以前とは変わらず汚れたままでした。

「こんな浦川は嫌だ!!。」

そこには、浦川の現状をなかなか受けとめることのできない私がいました。少しでもきれいにしたいと思い、友達と一緒に川の泥に埋もれたゴミや、川辺に落ちているゴミを小さい物から大きな物まで手あたりしだいに拾っていきました。全てのゴミを拾い終わると、昔の浦川に少しだけ近づいた気がしました。私自身も浦川がきれいになっていく様子を見て、とても晴れやかな気分になりました。

ボランティア活動は、年二回しか行われません。たった二回しか行わないボランティア活動で浦川が本当にきれいになっていっているのかは、実の所わかりませんでした。しかし、そんな時「シロウオが採れた」と聞いたのです。きっと私たちの小さな努力や地域の方の清掃活動が少しずつ実を結んでいることを知り、とてもうれしくなりました。

以前の私は、きれいな浦川がいつまでもそこにあると思い、汚れた川を見ても目を背けてばかりで一人では何もしようとしませんでした。目の前に広がる倉岳の豊かな自然を大切にしようとはしなかったのです。私は、この体験を通して、頭で考えるだけでなく自然を守るためには、実行していくことが重要だと思いました。それが、どんなに小さな一歩だとしても。

「球磨川と僕」

熊本県　球磨村立球磨中学校
二年　須　惠　翔　吾

毎日僕は、球磨川のほとりを走っている。川岸を走るのは、走る練習になるのはもちろん、すがすがしい気分にさせてくれる。このゴールデンウィーク中も、何度も球磨川下りの発船場を通りかかった。そこではたくさんの人でにぎわっていた。車を見てみると他の県から来た人がほとんどだった。

僕は、この日本三大急流の一つである球磨川に、多くの人々が観光に訪れていることをうれしく思った。また、最近ではラフティングも人気になってきている。益々、球磨川に訪れる人が多くなりそうだ。

実は、この球磨川の始めと終わりを僕は知っている。球磨川の始め、つまり水源は水上村の山の奥にある。僕が小学六年生の頃、球磨川の始まりはどうなっているのか不思議に思い父に尋ねた。すると車で何十分かの所へあると教えてもらったので早速行ってみることになった。しかし、水源へたどり着くには案外大変だった。とても急な登り道、高くて足が震えそうな崖など、水源を見に来たことを忘れそうになった。登り始めて約一時間三十分、ようやく目的地へ着くことができた。こんな場所に球磨川の水源があるとは想像がつかなかった。

あの球磨川の源とは一体どんな所なのだろうか。その答えがやっとわかる時がきた。

それは、僕が毎日見る勇ましく悠悠と流れる球磨川ではなく、一つポツンと、しかし懸命に湧き出ている水源の姿があった。ここからじっくり時間をかけて、他の水と交わりながら僕の家の近くを流れてきているのだ。

球磨川の終わりは、母の実家がある八代にある。水源から約百キロという道のりを経て八代海へと注ぎ込む。僕がよく見る球磨川の何倍もの幅となり、岸から岸までが見えないぐらい広くなり、海へと続く。ここへ着くまでにたくさんの小川と合流しながらこんなにも大きくなっているんだ、と少し感動した。

また、この球磨川の支流である「うのこ川」について小学二年生の自由研究で詳しく調べたことがある。調査の時に、川に生息している生物を探してみると小魚をはじめ様々な種類の生物がこの川で生きているんだということを知った。あの球磨川水源から八代海へ流れていくまでの中に、たくさんの生物が生まれ、育っている。しかし、水源で見た透明な水も流れていくにつれ汚れ、緑色に濁っていき、生物の生活を危うくしている。そして僕たち人間も含めて、生物は生きていくには水が必要だ。水を大切にしようというのも当然のことだと、その時改めて思った。

僕の母から聞いた話だが、祖父が亡くなった初盆に、八代海に近い下流の球磨川で灯籠流しをしたという。また、僕の家の近所では七夕に願いごとが叶うようにと竹を川へ流す行事も行われている。このように川は単に生物が住むための場所というだけではなく、人の魂や願いごとを受け止める大きな存在である。

僕が住んでいる近くには、こんなに素晴らしい球磨川がある。小学生の時に見た、あのこんこんと湧き出る清く美しい水源のイメージを忘れず、これからも守り続けていきたい。そして、たくさんの命の源である球磨川と共に育ったことを誇りにしたい。

「生かされている」

宮崎県　延岡市立三川内中学校
三年　日　髙　美耶子

私の住んでいる所は、緑が多く、水がきれいである。そのこともあり、私の住んでいる所では、山水を使っている家は少なくない。私の家もその一つである。山水というと、きれいだとか、おいしい等のメリットばかり考えてしまうかもしれないが、デメリットもある。例えば、台風が来たり、大雨になったりすると、浄化槽にゴミが詰まり、各家庭に水が流れないことがある。逆に、雨が降らなければ、水は少なくなり、これもまた各家庭に水が流れなくなる。私の家でも、このようなことはよくある。

水が少なくなると大変不便である。水道を全開にしても、水がちょろちょろしか出ないのである。そうすると、私の家では大変なことになる。家にある、空のペットボトルを探し、水をため、大きな容器にも水をためる。飲み水と、手や顔を洗う水を確保するためだ。もちろん、その日は、お風呂には入れない。

私は、幼いころから、このような体験を何回もしている。しかし、私は、このような生活が不便だと思っても、嫌いだと思ったことはない。それは、私が、幼いころから、このような生活をしているからかもしれない。しかし、このような生活は、自然といっしょに生きているということを感じさせてくれる。私は、この感じが好きだ。

人間は、水がなければ生きていけない生物だ。人間だけではない。他の生物もそうだ。水があるからこそ、木々は茂り、山ができる。山があるからこそ、きれいな水が流れる。そして、川になり、海になる。そこでは、たくさんの生物が生きている。それを、人間が食べ、土に返る。自然は循環しているのだ。その自然の循環の中で、人間は生きている。人間は自然によって生かされているのだ。しかし、最近は、自然の循環がこわされつつある。自然林は減少し、人工林が増加している。そのため、広葉樹林が減っている。また、水は、家庭排水に汚染され、魚が減っている。大気も、自動車や工場が出す排気ガス等で汚染されている。そのため、地球温暖化という環境問題も起こっている。私たちの地球は、今、苦しんでいるのだ。

私たち、生物にとって地球は母である。地球があるからこそ、私たちは、ここにいる。地球がもたらしてくれる恵みを私たちは、人間は汚してしまっていると私は思う。

しかし、今からでも遅くないのではないか。間に合うのではないか。今までの技術の発展は、どちらかというと、人間の自己中心的な考えで進んできたと思う。だが今は、いろいろな企業が、地球環境を考えた商品を発表している。

私たちは、企業のように大きなことはできないだろう。しかし、それは、「一人ではできない」という意味だ。世界各国で、一人一人が自然環境を考えた行動をとれば、それは、大きな大きな、自然を守る力になる。

だから、私はその一つとして、水を大切に使いたい。水道をこまめに閉めたり、水を必要以上に使わないようにしたりしたい。水、自然、地球に私は生かされていることを忘れずに。